

1 幼稚部・小学部の取組

(1) はじめに

幼稚部は、5歳児1学級1名である。幼稚部教育要領に記されている「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に「自立活動」の領域を加え、幼児の実態に合った内容を設定して保育を行っている。小学部は、1年生1名、5年生1名が在籍しており、それぞれが準ずる教育課程で学習している。学級活動や体育の一部の時間を合同で取り組む以外は、それぞれ学級別で授業を行っている。幼稚部・小学部合同で、運動会や学習発表会などの学校行事や誕生会などの季節行事を行い、学部間の連携や交流を図っている。

(2) 目的

聴覚障がい児は、聞こえにくさに起因して言語習得の困難さを抱えている場合が多い。そのために、幼稚部では、毎日の生活の中で具体的な体験を通して、言葉の意味が理解できるようにする。また、言葉を使って、様々な人とコミュニケーションを図ったり思考したり、言葉の概念を形成したりすることを通して、生活言語の獲得、日本語の獲得を目指す。

小学部では、幼稚部で身に付けた生活言語を基に教科学習を進め、学習言語を習得しながら、基礎的・基本的な学力の定着を図ることを目指す。教科学習を進めながら、実態に応じた指導内容の精選や指導方法の工夫に取り組み、人間形成を図りながら、一人一人の実態に応じた言語発達を促す。

(3) 実践内容

ア 幼稚部

〈日課表〉

	月	火	水	木	金	
8:40～9:30	※朝の活動（荷物の片付け、朝の仕事など）					交流 保 育
9:30～10:00	朝の会	朝の会	朝の会	行事	重 複 合 同	
10:00～10:30	絵日記	絵日記	絵日記			
10:40～11:30	音楽遊び	運動遊び	設定 保育			
11:40～12:20	設定保育	自立	設定 保育			
12:35～13:30	給食、歯磨き					
13:30～14:30	掃除、遊び					
14:30～15:30	※個別の指導 ※終わりの会、絵日記指導など					

※は、預かり保育として実施

(ア) 朝の活動

1日の流れを理解し、スムーズな活動が行えるように絵カードや文字カードを黒板に提示し、確認しながら進めている。全てをカードに頼るのではなく、覚えてきたことに対しては、大まかな項目のみを提示し、言葉掛けなどの支援をしながら、自分で考えて行動できるようにしている。一人学級ということもあり行動が遅れがちになることがあるため、時計の針を示して「ここまでにする」と時間を決め、意識できるようにすることもある。

(イ) 朝の会

毎月の歌、カレンダーワーク、お天気調べ、自分の朝御飯や昨日の御飯のメニュー発表、絵日記などを介して具体的なことを話したり、文章を覚えて発表したりしている。自分のしたことや経験した出来事を思い出して伝えたり、人の話を聞いてイメージをつかんで覚えたりすることを中心に行っている。言葉が理解できているか、イメージできているかを『もののなまえ絵辞典』等を使って確認している。



(ウ) 音楽遊び

週に1時間実施している。リトミックや季節に合った歌、幼児が楽しめる歌、幼稚園で習う歌を選択している。楽器では、カスタネット、鈴、トライアングル、太鼓、タンブリン等の打楽器を中心に、音の聞き分けやリズム打ちを行っている。また、鍵盤ハーモニカを練習しながら、階名を覚えたり指の使い方を覚えたりしている。



(エ) 運動遊び

週に1時間実施している。遊具や用具を使った運動遊びのほか、水遊び、ルールのある遊び等を行っている。1か月ごとに内容を検討して実施している。交流先の幼稚園で行っている遊びや運動も取り入れ、幼稚園でのスムーズな活動参加も目指している。



(オ) 学校行事・校外学習・幼稚部行事・設定保育

〈幼稚部行事〉

4月	進級お祝い会	11月	校外学習
6月	校外学習（動物園） 第1回幼児体験学習	12月	校外学習（買い物） クリスマス会
7月	七夕会・海浜学習（磯遊び）	1月	お正月お楽しみ会
8月	ぶどう狩り	2月	節分
10月	第2回幼児体験学習	3月	ひな祭り・お別れ会

各行事等、様々な体験活動に見通しや期待を持って参加できるように、事

前指導と事後指導を行い、言葉の定着の確認や理解の補足などを行っている。活動内容がイメージできるように、プレゼンテーションソフトを用いたり、絵カードや文字カードを使ったりするなど教材を工夫している。5W1Hを大切に考え、質問・応答のコミュニケーション力、言語力を育てることに配慮している。5歳児として経験させたいことや身に付けてほしいことなどを設定保育に取り入れている。



(カ) 自由遊び

在籍が幼児1名のみのため集団の確保は難しいが、担任との一対一の関わりだけでなく担任以外の教師等と一緒に活動する機会を設けることで集団の中でコミュニケーションを図ることができるようにしている。自由に遊べる時間が1日のうちで掃除後の時間しかないため、幼児のしたい遊びや教師が意図的にさせたい遊びを織り交ぜながら実施している。



(キ) 絵日記

学校でその日の活動の様子を写した写真を基に1日を振り返り、話し合いながら絵日記を書いていたが、現在は話が上手になってきたため家庭でも書くようにしている。学校では、初めて聞く言葉や出来事、興奮したこと、笑ったこと等を考えながら、心に残ったであろう事柄や、覚えてほしいと思う事柄を考えて写真を選んでいる。それを見ながら、音声言語での言葉の確認や発音練習、言葉の模倣などを行っている。

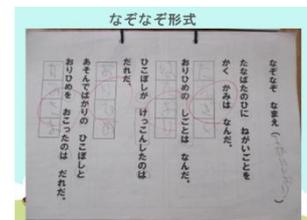


(ク) 連絡帳

連絡帳を活用して保護者との連携を図っている。幼児の様子や活動、トピックス、発音やコミュニケーションについて連絡、交換し合うことで情報共有がスムーズに行われている。

(ケ) 宿題

言葉の定着を図るために、行事や季節に関する言葉、学校生活の中で使用する言葉や振り返りに必要な内容をまとめたプリントを家庭学習用として配付している。



(コ) 交流保育

社会性や適応力を身に付けること、コミュニケーション能力の向上を目的として、幼稚部に入学する前に通っていた居住地の幼稚園で、週1回の交流を行っている。子供同士の関わりの中で刺激を受けている。

イ 小学部

(ア) 小学部 1 年生

1 年生の A は、聴覚活用を中心にコミュニケーションを取っている。発音が不明瞭なところがあるが、指摘すると素直に気を付けることができる。手話や指文字に興味を持ち、活用することで、音韻や発音の確認をして言葉の理解への手掛かりとしている。学校生活においては意欲的に授業や行事に取り組みしており、入学時は、5 W 1 H の質問に返答することへの苦手意識が強く、どう答えれば良いのか分からない状態であった。失敗を嫌がり、答えられないときは泣いてしまうことが多かった。人と関わるのが大好きで、自分から進んで教師や友人に話し掛け、会話を楽しんでいる。会話は、文の形で話をしようとする。しかし、語彙が少なく、話し慣れていない話題では、単語や擬態語を羅列するようにして話す。また、助詞や動詞の活用が不確かなことが多い。

そこで、上記の課題の改善・克服に向けて、

- ① 物の名前などを本児の経験から取り上げて、指導する。
- ② 学習した言葉を実際に使う練習をする。

以上、2 点の取組を実践した。

取組①では、日々の生活の中で児童が実際に経験した事柄や、見聞きした事象から学習する語彙を選択して、指導した。特に、学校行事においては事前指導や事後指導を充実させて、経験を通して出会った言葉をその都度押さえた。

取組②では、単元の学習内容に関連した語彙を取り上げて、語彙の取り立て指導を行った。内容は、前時に学習した語彙が中心だが、必要に応じて関連する言葉や覚えてほしい動詞や名詞も取り上げた。指導過程は、「知る→広げる→使う」で展開し、語彙拡充から活用までをねらいとした。

(イ) 小学部 5 年生

5 年生の B は言葉の定着がしにくく、学習したことを忘れやすいという傾向がある。人と話をすることは好きで、自分の言いたいことはどんどん話すが、質問に適切に答えられず、会話が続かないことがある。また、身の回りの物の名前や季節の言葉、意味を知らないことが多い。しかし、短い日記や手紙などは助詞や文の間違ひがあるものの、気持ちを書き表すことができる。宿泊研修での俳句作りでは、思い出を絵で描き、楽しそうに俳句を作っていたことが印象に残っている。

そこで、B の言語発達の課題として

- ① 状況や気持ちを相手に分かるように話す。
- ② 正しく受け答えする。
- ③ 言葉の意味を知り、語彙を増やす。

の3点を挙げ、本児が興味を持っている「俳句」を通して改善していくことにした。①は自分の気持ちを素直に詠む俳句作りを通して、②は句会や俳句の推こう（作った後の手直しや表現の工夫等）を通して、③は俳句の季語（季節の言葉）を触覚や味覚などの五感を通して観察したり、意味を歳時記や図鑑で調べたり、吟行などの外に出て季語をよく見て俳句を作ったりする活動を通して、改善していくことにした。国語の教科書に「日常を十七音で」という単元があり、俳句の作り方や表現の工夫について学習する機会に恵まれた。この単元を丁寧に取り扱うことによって、前述の課題の改善につながるのではないかと考えた。この単元は、「表現の工夫」を意識して学習が組み立てられており、同学年の5年生のみずみずしい俳句や先人の有名な俳句の鑑賞をした後、表現の工夫を取り入れて俳句を詠む活動を行うこととなっている。Bには表現の工夫を意識して俳句作りを行うよう継続して指導した。その際、俳句を作る前に、「なるべく五七五の十七音で作ること」「季語（季節の言葉）を入れること」「季語をよく見て、見たまま感じたままを詠むこと」の3点を確認してから俳句作りに進んだ。

(4) 成果と課題

ア 幼稚部

活動の中で、子供の実態に合わせて授業内容を決めたり指導内容を考えたりできたことで、子供が知らなかったことを即座に伝えたり、興味のあることを取り上げたりすることにつながり、子供からの反応に対して細かく対応することができた。子供が経験したことを話し合うことで、質問・応答のコミュニケーション力、言語力などを習得することができた。しかし、活動の広がりという面では、まだ難しい部分があった。幼稚部は一人学級のため刺激が単調になりやすくなれ合いになりがちである。そして、担任には理解できることであっても他の教師が聞くと分からないということもある。幼児の段階で理解力や表現力がしっかりと身に付き、誰にでも通じる言語能力やコミュニケーション能力が養われなければならない。幼児の発達段階だけではなく、生活年齢に合わせた指導内容や、幼稚部の段階で必ず身に付けておくべきことを見極めることも必要である。そのために必要な教師の指導、支援はどうあるべきかについて検討し、更に専門的な知識と技能を身に付ける必要がある。

イ 1年生

取組①「物の名前などを本児の経験から取り上げて、指導する」においては、学校行事が大好きなAは、様々な活動に意欲的に取り組んでいる。活動中にはいろいろなことに興味を持ち、「これは何？」という疑問を素直に表現できた。児童が疑問を抱いたタイミングで意味を伝えることによって、実物を見ながら物の名前やその特徴を学習することができた。この学習は教科書

を用いた学習よりも比較的覚えが早い。しかし、行事が過ぎてしまうとなかなか復習する機会が確保できず、時間が空いて忘れてしまっている言葉も多い。定着を図るには、他の行事や事柄と関連させて、復習の機会を設けることが必要であり、課題である。また、普段の授業においては、分からない言葉が出てきた際に、教科書や絵ことば辞典で確認することが多い。できるだけ実物を確かめたり写真を見せたりするなど、本物に触れたり視覚的に理解できる方法を取り入れたりすることを大切にしていきたい。

取組②「学習した言葉を実際に使う練習をする」においては、初めは教師が欲張って内容を盛り込みすぎてしまい、児童が答えられず、学習意欲をそいでしまうことがあった。そこで、授業始めの5分間程で解ける難易度と問題量に変更した。小テスト形式だったものを、言葉遊びやゲーム、クイズというスタイルに変えて、現在は楽しみながら言葉の学習ができています。実践を続ける中で、少しずつ語彙が身に付いてきた。現在も、繰り返し学習の機会を設けて定着を図っている。語彙の指導においては、その言葉の意味を追求するだけでなく、その語彙に慣れ、使われる文脈や状況を知り、児童が自分の言葉として使えるようになることを目標にして、指導方法の改善に努めたい。

ウ 5年生

以下、三つの課題の改善に向けた取組の成果と課題について記す。

課題①「自分の気持ちを相手に分かるように話す」では、俳句を通して自分の気持ちを素直に俳句で詠めるようになってきた。五七五のリズムが身に付きやすいのか、現在はほぼ五七五で詠めるようになってきている。俳句を作るのが楽しそうで、近くの教師に「先生も一緒に俳句を作ろう。」と誘ったり、自分の俳句を児童や教師に披露したりと伝えたい意欲がおう盛である。よう音の数え方や季語の使い方（季重ね）など俳句の決まりについても定着するよう継続して学習していきたい。

課題②「正しく受け答えをする」では、推こうやミニ句会を通して、児童とのやり取りをできるだけ丁寧に行ってきた。出来上がった俳句を板書し、五七五で詠んでいるか、季語が入っているか、二人で話し合いながら確認した。より良い表現ができないか、意見を出し合い言葉を選んだり見付けたりする時間を大切に。「こんな表現もあるんじゃない？」と言うと「いや、僕の方がいいよ。」と言い、きちんと自分の意見も述べるできるようになった。また、教師の話も最後までよく聞き、意見の違いに耳を傾け、教師の言い分も受け入れる場面が見られるようになってきた。ミニ句会では、好きな俳句を選び、それを選んだ理由も言い、選んだ俳句に花を付けるのを楽しんでいる。教師の俳句を見て、花丸を付けてくれる。俳句の学習を通して、教師とのやり取りが少しずつ豊かになってきて受け答えがスムーズにできることも増えている。

課題③「言葉の意味を知り語彙を増やす」では、俳句の季語である「梨」を手で触ったり、味わったりしながら五感を通して観察するのがとても楽しい様子だった。また、黒トンボを調べたら、ヤンマ（オニヤンマ）という名前だったことを知り、すぐ友達に知らせに行った。「トカゲに刺された」と思っていたのが、実はムカデだったことから、日頃、読書の苦手なBが自ら歳時記を開いて難しい漢字を教師に聞きながら読み進めていたことに驚いた。またムカデの漢字が百足虫と書くことなどの教師の説明に興味を示した。教師にねこじやらしの遊び方を教えてもらい、何度も繰り返し遊び、楽しそうに俳句にその様子を詠んだりした。興味を持って調べたり、体験したりしたことはすんなりと自分の中に入り、言葉の定着に結び付きやすいことを感じる。今後も体験したことや感じたことを言葉にしながら語彙を増やしていきたい。

国語の時間のねらいである「表現の工夫」への取組では、少しずつ効果が見られ始めている。「鳥取県 梨をもらった おいしいよ」を「鳥取県 梨をもらった 甘い味」へ、「教室へ またまたトンボ やってきた」を「教室へ またまたトンボ 大騒ぎ」へ、「オニヤンマ 扇風機に、ぶつかった」を「オニヤンマ 扇風機にね 大当たり」へ推こうするなど表現の工夫も見られるようになった。

最後に、俳句の時間はBの笑顔が多く見られ、教師とお互いの意見を伝え合える大切なコミュニケーションの場となっている。俳句を通して、今、Bが何を考えているのか、Bの内面に触れることのできる心和む時間でもある。今後も様々な学校生活の場面を通して、俳句に親しんでいきたい。俳句を通して、表現活動を高める取組をBの言語発達を促していくことにつなげていきたい。